



その4

絵図から読み解く江戸時代の里山景観

京都精華大学

小椋純一

江戸時代以前の古い時代の植生景観を知る上で、絵図(注1)が役立つことがある。しかし、「絵図」という言葉もあるように、絵図には「真実が描かれていないことも少なくない。一方、動植物図鑑の挿図などでしばしば見られるように、絵には写真と同等、あるいはそれ以上に実物をそれらしく表現できるという特性もある。

そうしたことから、かつての景観を描いた絵図には、真実が描かれていないものから、実態がきわめて忠実に描かれているものまで、さまざまなものがある。また、一枚の絵図の中にも実態が描かれている部分と、そうでない部分があることも珍しくない。そのため、ある絵図が過去の里山の景観を知る上でよい史料となるかどうかは、なんらかの方法で慎重に検討される必要がある。

方法

そのための方法としては、検討対象とする絵図にまつわる情報(注2)を可能な限り多く把握した上で、①同時代の他の絵図や文献記述との比較考察、②山や谷などの地形描写の分析的考察、③岩や滝などの特徴的なものの描写と現状との比較、④絵図の彩色の検討などがある(注

3)。それぞれの絵図により、使える方法は限られることが多いが、可能な限り多くの方法で検討し、それを総合することによって検討する絵図の資料性(注4)が確認できれば、その図が描かれた時代の景観が浮かび上がってくる。それがどれほど明らかなものになるかどうかは、その図の資料性の高低による。もし、なんらかの方法で資料性が確認できなければ、絵図から読み取れる情報は、根拠がなく参考にしかならない。

考察例：原在中筆「東山三十六峯図巻」(1803年)を中心に

ここでは、多くの絵図が残り、絵図からの研究が比較的容易な京都の例を少しご紹介してみたい。図1は「東山三十六峯図巻」(京都府蔵(京都文化博物館管理))と題された巻物(長さ254センチ、幅約57センチ)の一部である。本稿では図の数に制限があり示すことができないうが、図の手前にはマツやサクラの多い美しい庭園や洛北の田園風景なども描かれており、その先(上方)に東山などの景観が広く詳細に描かれている。その図が原在中(1750〜1837年)によるものであり、享和3

(1803)年に完成していることは、それに記された款記や落款から知ることができる。

その図中には山名や地名などの書き入れが多く見られる。そうした書き入れは概ね正確であり、その数がかかり多いことから、本図は単なる風景絵巻ではなく、視点(大徳寺付近)から見える景観の実態を何らかの目的で正確に描こうとしたものと思われる。

図の作者である原在中については、いくつかのまとまった論考がある(注5、6)。それらによる

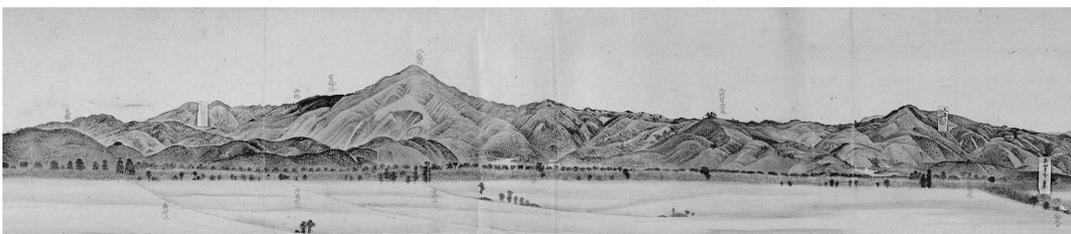


図1 「東山三十六峯図巻」(部分;図中央よりも少し左手に比叡山が高く、また図右手に大文字山がやや高く描かれている)

と、早くから名を成していた在中は、写生を極めた画風で知られる円山応挙の影響を強く受けていた可能性が高い。かなり写実的な描写が広く見られる「東山三十六峯図巻」は、応挙の強い影響が感じられる作品の一つである。

「東山三十六峯図巻」は、実景を写実的に描いた真景図と見られるものである。在中自身も款記に「享和三年癸亥春三月 原在中寫真」と記している。ただ、それがどれほど実景を忠実に描いたものであるかは、ただ図を見るだけではわからない。

しかし、このような真景図については、そこに描かれた山や谷などの地形描写を、詳しい地形情報をもとに作製したモデルや現況との比較考察を中心に、その資料性をかなり明らかにできることがある。その際、図が描かれた視点をできるだけ正確に特定することは、とくに重要である。

〈視点の特定〉

絵図の視点を特定するには、地形図なども適宜用いながら、足でかせいで探すが一般的な方法であるが、今日では樹木の繁茂や市街地の拡大などにより、求める視点を自由に探すことが困難なことも少なくない。そのようなときには、精度の高いデジタル化された地形情報を利用して、パソコン上で視点を特定することもできる。そのためのソフトウェアとして、カシミール3D（注7）などがある。なお、絵図には複数の視点をもとに広範な風景を描いたものもあることから、その作業はさまざまな可能性を考

えながら慎重になされる必要がある。

「東山三十六峯図巻」の場合、市街地の拡大などにより視点を地上から探すことが難しいため、図に描かれた山の形状や山なみの重なり状況などから地図上でおおよその視点を予め推定した後、最終的な視点の特定はカシミール3Dを用いておこなった。その結果、同図はかなり広範な場所を描いた図ではあるが、東山などの山なみの部分については視点が一つと考えられる。その視点は京都の北西、船岡山の北東約700mのところ（大徳寺山門付近）で、建物の上階、地上6mほどの高さのところが考えられる。

〈比較考察〉

「東山三十六峯図巻」の描写の一部を詳しい地形情報をもとにした現況地形や現況と比較して考えてみたい。なお、この比較考察の前提として、対象とする場所の地形が、図が描かれた頃以降、大きく変化していないことが必要である。ここで対象とする場所の一部には、図が描かれてから今日までの200年余りの間に、比較的小規模な土砂崩れがあったところも一部あるが、全体的には大きな地形変化はないと考えられる。

図2上段の「東山三十六峯図巻」の部分には、左方に比叡山が大きく描かれ、また最も右方には瓜生山のあたりが描かれている（図右方の長四角は後の説明のためのもの）。図の左方下部には主に京都盆地北東の松ヶ崎地域の山なみが描かれているが、その背後には岩倉地域南東の

かみたかの 上高野地域の山なみも少し見えている。

図2中段の図は、カシミール3Dにより作成した現況地形モデル（視点は図1と同じで地上に植生がない場合の状態）で、図2上段部分に対応するところである。その地形モデルは、国土地理院の基盤地図情報をベースにした5mメッシュの高密度地形データが反映されている（注8）。また、図2下段の写真は、「東山三十六峯図巻」の視点から南西約700mの船岡山から対象地を撮影したものである。

「東山三十六峯図巻」の山なみの景観がどの程度写実的に描かれているか、またそこにあつた植生の状態などについて、それらを詳しく比較検討することにより、次のようなことがわかる。

- ・「東山三十六峯図巻」の山なみは、全体的に高さが少し強調されて描かれている。
- ・この「東山三十六峯図巻」の部分では、上高野の山なみがわずかといえしつかりと描かれているのに対し、現況地形モデルでは、その山なみの部分はほとんど見ることができない。そのことから、「東山三十六峯図巻」では上高野の山なみの部分が、実際よりも少し右方（南方）へ移動して描かれていることがわかる。
- ・この「東山三十六峯図巻」の部分は、比叡山の頂上付近から右方（南方）瓜生山のあたりにかけて一部省略して描かれているところがある。
- ・上記のように、「東山三十六峯図巻」は写真のように写実的でないところも一部にある

が、図のほとんどの部分において、山の稜線や谷などの地形がきわめて写實的に細かく描かれている。

・山の稜線などの形状が「東山三十六峯図巻」と現況地形モデルとでよく一致し、図の山地部でとくに目立った樹木として描かれているものは瓜生山のあたりにしかないこと、また、高い樹木が山の大部分を覆っている現況では見ることができない多くの小さな谷も図には

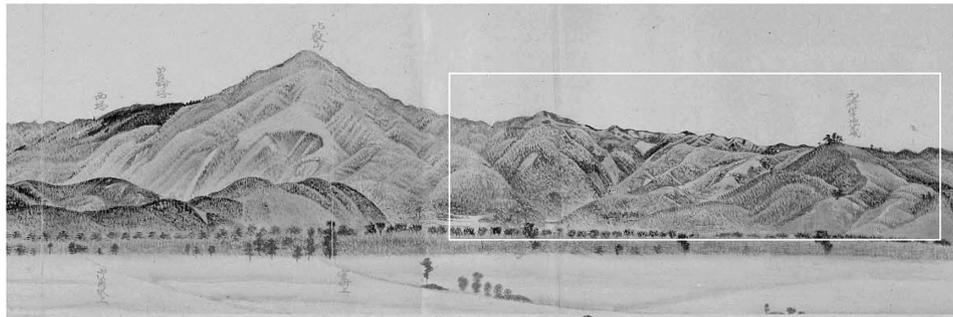


図2 上より「東山三十六峯図巻」(比叡山からその南方の瓜生山付近)、カシミール3Dによる現況地形モデル、船岡山より見た近況

比較的明瞭に描かれていることから、この「東山三十六峯図巻」の部分に見える山地の大部分は、植生がかなり低いか、植生もないようなところもあつたものと考えられる。

〈図に描かれた樹高の推定〉

「東山三十六峯図巻」の瓜生山上部に見られる目立った木立は、そこにある将軍地蔵付近のものであり、それは江戸時代初期から末期にか

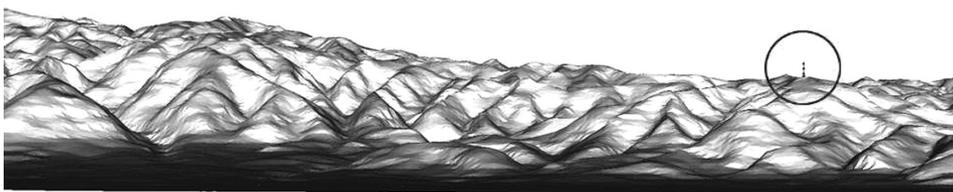


図3 AutoCADによるシミュレーション(円の中央部に樹高30mの指標樹木モデルが見える)

けてそのあたりを描いた絵図には共通して見られることから、そこに目立つ状態で長年存在していたことは疑いない。その数本のマツと見られる樹木の樹高については、現況地形モデルのその部分に指標となる一定の高さのものを置くことで推定することができる。カシミール3Dでは、その作業ができないが、建築や土木などで使われる3次元CADなどで、その作業をおこなうことができる。

図3は、国土地理院が公開している基

盤地図情報をもとにAutoCAD(オートデスク社)で作成した地形モデルの該当箇所に高さ30mの指標樹木モデルを挿入したものである。その図の視点は「東山三十六峯図巻」と同じところで、指標樹木モデルは図中に示した円の中心部にある。このモデル全体の範囲は、図2上段の図に長四角で示した部分であり、両図の比較から「東山三十六峯図巻」に見えるその大きく目立つ木々の樹高は、絵図では樹木の高

さも少し強調されやすいことを考慮しても、20
以上の高さがあつた可能性が高いと考えられ
る。

〈彩色などからの検討〉

本稿の図はカラーでないため確認することが
できないが、原本の「東山三十六峯図巻」では
瓜生山の左方(北方)の山の稜線付近を中心に、
薄い赤茶系

の色で山地
が塗られて
いる。その
付近は、江
戸初期以降
の絵図で共
通して草木
が乏しいハ
ゲ山が表現
されている
と見られる
ところで、
その部分は
ハゲ山を示
しているも
のと考えら
れる。
ちなみに、
図4は京都
の役所方が
作成したと
思われる18



図4 「京師大絵図」(比叡山から大文字山付近; 18世紀初頭、慶応大学蔵)
〔左上方の比叡山から右端の大文字山の間には、ハゲ山が白色系の色を使い広く描かれている〕

世紀初頭の大絵図の一部で、比叡山から大文字
山付近が描かれている部分である。その図では
ハゲ山の部分は白っぽく描かれており、「東山
三十六峯図巻」が描かれた頃よりも100年ほ
ど前は、ハゲ山の範囲がより広がった可能性を
示している。なお、そのハゲ山の部分は花崗岩
地帯であるため、そこに草木がなければ、光の
加減で実際にかなり白っぽく見えたものと考え
られる(注9)。

一方、比叡山の左方(北方)の稜線の付近に
黒っぽく描かれている部分は、図が描かれた早
春の頃も濃い緑の樹木がまとまって存在した所
と思われる。その部分は、現在スギの大木が多
く見られる所であり、延暦寺のスギの植林地と
考えられる。

おわりに

以上、「東山三十六峯図巻」の一部の描写と
現況地形モデルや現況との比較考察、また図の
彩色の考察などから、検討した「東山三十六峯
図巻」の部分は資料性がかなり高いことがわか
る。そして、その図が描かれた200年あまり
前、比叡山の京都側の部分は、かなり低い植生
のところが多とんどで、一部には草木が乏しい
ハゲ山が広がっているとところもあり、高木の樹
木が見られるところはわずかしかなかったと考
えられる。

本稿で例示した「東山三十六峯図巻」は、数
ある京都の絵図の中でも里山などの景観を多く
に写實的に描いているものであり、このような
絵図が多く存在するわけではない。ただ、一見

写實的と見えない絵図の中にも、里山などの実
態がかなりよく反映されて描かれているものも
ある。本稿では、そうした絵図について例示す
ることができなかったが、そのような絵図も含
め、何らかの方法により絵図の資料性がある程
度でも確認できれば、写真がない時代の里山の
景観がそれなりに明らかになる。さまざまな絵
図の考察からは、多くの場合、上記の例のよう
に概して人の影響がきわめて大きいかつての里
山の景観が明らかになることであろう。

〔注〕

- (1) 絵図という言葉は、かつては絵地図を意味し、今日でもその
ような意味で使われることもあるが、ここでは里山などの景観を描
いた絵画や版画なども含む言葉として用いている。
- (2) ネット情報はもちろむ、本や論文からの情報も間違っている
ことがあるため、必要に応じてそうした情報も検証したりしながら、
検討する絵図類について正確な情報を慎重に把握する必要がある。
- (3) 小椋純一(1992)、「絵図から読み解く人と景観の歴史」
雄山閣出版
- (4) 絵図の中には、写実性が必ずしも高くはなくとも、過去の植
生景観を知ることができる史料となるものも少なくない。そのため、
資料性と写実性は必ずしも同義ではない。
- (5) 土居次義(1944)、「原在中の画業」、『日本近世絵畫攷』
283頁290
- (6) 松尾勝彦(1983)、「原在中研究」『美術史』Vol. 32 No.
2, 121頁127
- (7) DAN杉本氏作成の地図・GISソフトウェア。各種地図や
GPSデータなどを読み込むことはもちろん、標高データを基に、
任意の視点から見た地形を立体的に表示する機能(カシバード)な
ど、さまざまな機能がある。
- (8) カシミール3Dはフリーソフトであるが、スーパー地形セッ
ト(ライセンス…1年分税込1680円)(2021年2月時点)を
を組み込むことにより、国土地理院の高密度地形データを反映した
表示が可能になる。
- (9) 高知県出身の著名な植物学者であった牧野富太郎が、明治14
(1881)年4月に東京へ初めて旅をした際、高知から乗った蒸
気船が神戸に近づいたときに、ハゲ山が広がっていた六甲の山なみ
を見て、「はじめは雪が積もっているのかと思った」と随想に記し
ているのも、花崗岩地帯のハゲ山が白く見えることがあることをよ
く示している。